

## 目次

食用昆虫の研究を始めて……………1	寄贈図書一覧（2020年7月～12月）……………4
岐阜大学の古典籍(4)	感染症と図書……………6
飛騨高山で生まれた『竹取物語』研究書～その2～ ……3	お知らせ……………8

## 食用昆虫の研究を始めて



今泉 鉄平

最近、食用昆虫についての話題がにわかに盛り上がりを見せている。その大きな契機として、FAO（国際連合食糧農業機関）が発表した食用昆虫に関する報告書”Edible Insects: Future Prospects for Food and Feed Security”（食用昆虫：食料と飼料確保のための未来展望）がある。この報告書では、2050年には90億人にも達する世界人口に対してタンパク質の供給が追いつかなくなるプロテインクライシスへの対策として、食用昆虫の利用拡大が有効であるということを述べている。また、2018年には昆虫を Novel Food（新規食品）として規定する新しいルールがEUで施行され、食用昆虫の域内流通

を大きく後押しすることとなった。日本国内では大手量販店がコオロギ粉末を使用した煎餅を販売したことで話題を集めたほか、大手のパンメーカーがコオロギのバゲットやフィナンシェを売り出している。最近ではフードテック（食×テクノロジー）の一つとして代替タンパク質も注目を集めており、大豆ミートや培養肉とともに食用昆虫についても市場拡大やスタートアップ企業の増加が見込まれている。

実は私も食用昆虫に関する研究に携わっている研究者の一人である。私は博士課程学生の時に、九州大学のポストハーベスト工学の研究室に籍を置いていた。私の所属していた研究室では、農産物の収穫

後処理や貯蔵方法などに関して、野菜の組織構造観察やコンテナ内のガス拡散シミュレーション、青果物表面の殺菌方法検討など幅広いテーマを扱っていた。これに加えて、柿果実に寄生するフジコナカイガラムシやお米の貯蔵中に発生するコクゾウムシの防除など昆虫に関する研究対象としていた。このように昆虫や食品に関する研究のノウハウもあったことから、ラボの教授が食用昆虫の研究を2018年より始めることとなり、私もそのプロジェクトに声をかけていただいたという経緯である。

食用昆虫に関して私の研究室で最初に行ったのは、コオロギパンの品質評価であった。岐阜大学の応用生物科学部ではパンに関する研究（パンの美味しさや酵母の研究など）に携わっている先生が多く、2017年よりパンシンポジウムを行っている（新型コロナウイルス流行のため、2020年は開催見送り）。私も実行委員の一人として運営をお手伝いさせていただいていたこともあり、研究の方でもパンに関する内容を出来ればと思い、コオロギパンの研究をスタートさせた。実際、国際的な学術雑誌ではコオロギパンに関する研究報告もいくつか見られ、多量のタンパク質を効率よく摂取するために、パンのような主食に混ぜるというアプローチは有効であると考えた。これに加えて、現在は実際に研究室内でコオロギを飼育し、消費者嗜好を考慮した品質制御の可能性を模索しているところである。

そういった形で食用昆虫に関する研究を進めていく一方で、昆虫食の歴史の深さについても知ることとなった。我が国でも、伝統的にイナゴや蜂の子（へぼ）を食してきたのはよく知られており、岐阜県では恵那の方で「くしはらへぼまつり」という催しが毎年行われている。また、島崎藤村が執筆した「夜明け前」にも木曾の食事として地蜂の子が挙げられている。さらに時代を遡ると、江戸時代に著された食物本草書である”本朝食鑑”に阜蝻（イナゴなど）を食べていたとの記載があり、昆虫食が日本

の食文化として受け入れられてきたことがわかる。余談だが、私も研究室やiGEM-Gifuの学生と一緒に大学祭でへぼを使ったミネストローネを販売したことがあり、賛否両論のご感想をいただいた（否が多め?）。また、世界の国々に目を向けてみても昆虫食に関する記録は非常に多く、例えば、古代ギリシャの哲学者であるアリストテレスが書いた動物誌には彼がセミを食べていたことを示唆する記述もある。北米やヨーロッパでは古くからの昆虫食文化は廃れているようだが、アジアやアフリカでは現在も昆虫を一般的に食している地域、民族が少なくない。私は仕事で何度かタイに訪れたことがあるが、市場でさまざまな種類の昆虫が食用として販売されていたり、スーパーで昆虫のスナック菓子が売られていたりしている様子を目にした。伝統的な昆虫食とフードテックにおける昆虫食は区別して考える必要があるが、先人が培ってきた食経験や栄養性、機能性などの知見は参考になることもありそうだ。

食用昆虫に関してはキャッチーな内容であるため、多くの学生、職員、企業の方々に私の研究室について興味を持っていただくきっかけとなっている。私も調子に乗って実習に昆虫含有食品を持って行ったりしているのだが、最近は食用昆虫のイメージがつきすぎているのではないかと一抹の不安を抱いている。もともとの研究対象は野菜や果物といった農産物であり、加工中の組織構造や食感の変化を主な研究内容としているので、そちらもご興味のある方は研究室にも足を運んでいただきたい。

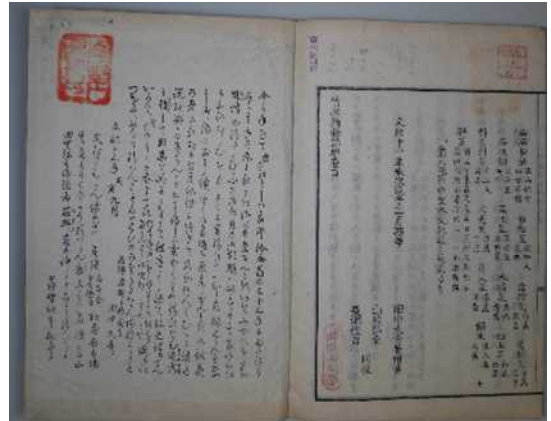
最後に、昆虫を食べる際にはアレルギーや毒性、衛生面など考慮しなければならないこともあるので、その辺にいるよく分からない虫を躊躇なく口に運ばないように、ご注意いただきたい。

（いまいずみ てっぺい：応用生物科学部 応用生命科学課程食品生命科学コース 農産食品プロセス工学研究室 助教）

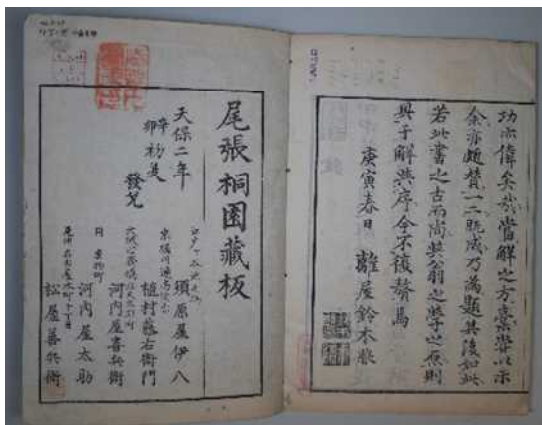
## 岐阜大学の古典籍 (4) 飛騨高山で生まれた『竹取物語』研究書～その2～

教育学部国語教育講座准教授 小川 陽子

前回は飛騨高山の国学者・田中大秀が著した『竹取翁物語解』を取り上げ、①『竹取物語』研究において近現代に至るまで重視されてきた研究書であること、②岐阜大学が所蔵する天保2年版（整理番号 913.31 - 1.1～6 - 53601）の第1冊（首巻）末尾には大秀の師・本居宣長の追悼企画に関する貼り紙があることを確認しました（右写真。左側に貼り紙あり）。今回は②の貼り紙を詳しく見ていきます。



この紙は、文政13（1830）年9月に大秀が執筆したものを印刷しています。それによれば、3年後が宣長の三十三回忌にあたるため、大秀は同年の春秋に御霊祭を行いたいと考えていました。そこで大秀が発案したのが2つの企画です。まず1つは、その御霊祭において宣長像の前で和歌を読み上げること。もう1つは、宣長の著した『古事記伝』に関する論考を集め、『古事記伝追考』と題して出版すること。いずれも、志を同じくする人々から原稿を募り、成し遂げたいというのが大秀の望みでした。そのために執筆したのが、②の募集文であったわけです。大秀は、「癸巳の年（＝1833年、三十三回忌の年）の春までに」と締め切りを設けつつも、遅れても受け付けて次に出すとも記しており、この企画に強いこだわりを持っていたことがうかがえます。



では、これを読んで賛同した人が原稿を大秀に届けるにはどうしたら良かったのでしょうか。この貼り紙には、賛同者の歌文送付先として松屋善兵衛の名が記されています。松屋善兵衛は、この募集文が貼られている天保2年版『竹取翁物語解』の版元のひとつです（左写真参照。末尾に「尾州名古屋本町十丁目 松屋善兵衛」とあり）。大秀は、志を同じくする人々へ企画を知らせるための募集文を自著に添え、さらに賛同者の歌文を受け取る手立てとして自著の版元を指定したのでした。

しかし、現存する天保2年版『竹取翁物語解』のすべてにこの募集文が貼られているわけではありません。たとえば国文学研究資料館の所蔵する2点（初雁文庫本・長谷文庫本）\*1はいずれもこの貼り紙が見受けられません。一方、ベルリン国立図書館所蔵本\*2は、この募集文がありますが、貼られている場所が岐阜大学本とは異なり、第1冊の見返し部分となっています（国文学研究資料館「日本

古典資料調査記録データベース」によれば、金沢大学所蔵本もベルリン本と同様ようです。販売の時点で一部の本にしかこの募集文が添えられなかったのか、あるいは、すべての本に添えられたにも関わらず一部の本では令和に至るまでに募集文が失われてしまったのか、定かではありません。しかしいずれにせよ岐阜大学本は、大秀による追悼企画募集文を今に伝える貴重な本と言えるでしょう。

残念ながら、和歌・『古事記伝追考』ともに、その実現を裏付けるような資料は見つかっておらず、大秀の企画が実行に移されたのかどうか判然としません。しかし、たいへん興味深いことに、大秀没後百年にあたり『田中大秀』（1954年・斐太中央印刷、岐阜大学図書館請求記号：289.1||19）という書物が編纂された際に、池田亀鑑が「竹取翁物語追考」という論文を執筆しています。池田亀鑑はその論中において大秀の宣長追悼企画募集文に言及し、「その師をうやまひ、道を尚ぶ心ざしの深き、何人か襟を正さざらむ。この小稿の名は、かく翁が先師の三十三年忌に企てられし古事記伝追考の素志に肖かりて、題しつるなり」と記しています。大秀の企画した『古事記伝追考』は、宣長の『古事記伝』を学問的にさらに発展させようとしたものでした。これに対し、池田亀鑑は、大秀の『竹取翁物語解』を高く評価した上で、それをさらに発展させるべく、論文を執筆しました。「古事記伝追考」を企画した大秀の思いは、大秀本人を顕彰する書籍において「竹取翁物語解追考」という形で確かに受け止められ、宣長・大秀の学問が近代へと継承されていく一助となったのです。

\*1, 2「日本古典籍総合目録データベース」掲載画像による。

---

## 寄贈図書一覧（2020年7月～12月）

2020年7月～12月に図書館にご寄贈いただいた図書の中で、本学教職員が著作・編集・刊行等に関係した図書を掲載します。ご寄贈いただき、ありがとうございました。

### ●楠田 哲士（応用生物科学部）

- ・神の鳥ライチョウの生態と保全:日本の宝を未来へつなぐ  
/楠田哲士編著, 緑書房, 2020. 12 【図本館 3階 488.4 | Kam】

～内容紹介～

ライチョウの分類、生態、歴史、課題、保全など、すべてを網羅することを目指した決定版。

2020年11月に本学が主催した第19回ライチョウ会議ぎふ大会にあわせて出版を企画し、関係者74名で執筆しました。

- ・冬のともだち /寺本こうたろう作・絵, 楠田哲士編, 岐阜大学応用生物科学部動物繁殖学研究室（自主制作）  
2020.11 【図本館 3階 726.6 | Ter】

～内容紹介～

過酷な冬のライチョウの生きざまを描いた心温まる絵本です。得意のイラストを通して動物のことを伝えたいという、応用生物科学部 生産環境科学課程の学生の思いを実現させるために制作しました。

## ●杉山 真魚 (教育学部)

- ・分離派建築会 100 年:建築は芸術か?=100 years of Bunriha : Can architecture be art?  
/ 大村理恵子, 本橋仁編;分離派 100 年研究会執筆, クリストファー・スティーヴンズ, 深見優子,  
株式会社フレーズクレーズ翻訳, 朝日新聞社, 2020.10 【図本館 3 階 523.1||Bun】

～内容紹介～

2020 年 10 月～2021 年 3 月開催の展覧会 (パナソニック汐留美術館・京都国立近代美術館巡回) の図録です。今から 100 年前に新しい建築のあり方を模索した建築家たちの活動を追っています。

- ・ガーデン研究会ジャーナル (1) (2) (3) (4)  
/ 石倉和佳編, ブックウェイ, 2015.3-2018.3 【図本館 3 階 629||Gad】
- ・カルチュラル・グリーン (1)  
/ 石倉和佳, 杉山真魚編, ブックウェイ, 2020.3 【図本館 3 階 389||Kar】

～内容紹介～

英国の自然 (庭園、植物採集等) に関する研究会として発足したガーデン研究会、およびその後身として学際的なプラットフォームにおいて自然と人間の関わりを問うカルチュラル・グリーン研究会が発行する論文集です。

## ●牧 秀樹 (地域科学部)

- ・助動詞・仮定法 (英語 monogrammar, vol.4)  
/ お茶の水ゼミナール英語科著, 牧秀樹監修, 開拓社, 2020.7 【図本館 3 階 835||Oty】
- ・時制・相 (英語 monogrammar, vol.5)  
/ お茶の水ゼミナール英語科著, 牧秀樹監修, 開拓社, 2020.7 【図本館 3 階 835||Oty】

～内容紹介～

本英文法シリーズ④助動詞・仮定法と⑤時制・相は、特定の文法項目に焦点を当て、「英語を作る」力を伸ばすよう設計された参考書・問題集。文法理論の観点から文法を解説し、母語話者のように英語を作る練習をします。

- ・最小英語テスト「kMET」ドリル 金言版 / 牧秀樹著, 開拓社, 2020.10 【図本館 3 階 830.79||Mak】

～内容紹介～

「世界の偉人の言葉、英語で言ったら受けるかも。」そんな方に、このドリルをお勧めします。気の利いた先人の言葉を、ちらっと英語で言ってみたら、会話が妙に弾むかもしれません。CD 付き、金言 MET 14 題収載。

※内容紹介は著者または編者本人による

## ～感染症と図書～

新型コロナウイルスの感染拡大で世界中が様々な変化や困難に直面しています。

皆さんの身近なところでも、大きな環境の変化が起こり、不安や不便を感じていることも多いのではないでしょうか。人類はこれまでの歴史で幾度も感染症の流行を経験し、時には根絶に成功し、時には共生するための方法を探ってきました。今回は地域科学部の加藤公一先生（現代史）と図書館員から、感染症と社会とのかかわりについて取り扱った図書を紹介します。【 】内は本学図書館の所蔵場所と分類記号です。

### 《加藤公一先生ご推薦》



- (1) 藤野豊 著『戦争とハンセン病』（吉川弘文館 2010.1）【図本館 3 階 494.83||Huz】

日本における感染症で、現在もなお大きな禍根を残しているものがハンセン病である。著者は、早くから歴史学からハンセン病に注目してきた研究者で、近代日本の戦争とハンセン病とがどのように関わったかについて、専門家以外の人びとに向けて平易に記述した本。



- (2) 飯島渉 著『感染症と私たちの歴史・これから』（清水書院 2018.8）

【図本館 3 階 493.8||Iiz】

著者は、中国近代史研究者で、ペストやマラリアなどの感染症とそれに対する医療や衛生を専門としてきた。アフリカ大陸に始まる人類の起源から、AIDS や SARS などの現代の感染症までを扱う。



- (3) 小田中直樹 著『感染症はぼくらの社会をいかに変えてきたのか：世界史のなかの病原体』（日経 BP 2020.7）【図本館 3 階 493.8||Oda】

近代フランスの社会経済史研究者が、感染症と社会の相互作用について近現代を中心に概説する。(2)と(3)を合わせて読むことで、「東洋」と「西洋」の視点から感染症の歴史を概観することができる。



- (4) 詫摩佳代 著『人類と病：国際政治から見る感染症と健康格差』（中央公論新社 2020.4）  
【図本館 3 階 498||Tak】

国際政治学の観点から、ペストやコレラなどから現在の新型コロナウイルスまでのさまざまな感染症と戦後の国際保健機関（WHO）などの保健医療の国際的な協力について書かれた新書。



- (5) 金森修 著『病魔という悪の物語—チフスのメアリー』（筑摩書房 2006.3）  
【購入準備中】

20 世紀初頭の米国で腸チフスの無症状感染者が遭った運命について、科学思想・科学史の専門家が中高生向けに平易に書いた新書。移民に対する差別の問題もあり、現代社会が学ぶべき点も多い。

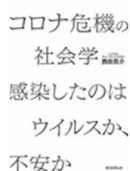
《図書館員推薦》



(1) 村上陽一郎 編『コロナ後の世界を生きる：私たちの提言』（岩波書店 2020.7）

【図本館 3階 304 | |Kor】

テルマエ・ロマエで有名なヤマザキマリ氏、岐阜大学元学長の黒木登志夫氏など、様々な分野の有識者と呼ばれる人達が、これまでの感染症の歴史を含めコロナ後の世界全体に目を向けて意見を述べている作品。敷居が高く見えますが、1章の長さは短めなので焦らず少しずつ読み進めていただきたい作品です。



(2) 西田亮介 著『コロナ危機の社会学：感染したのはウイルスか、不安か』

（朝日新聞出版 2020.7）【図本館 3階 498.6 | |Nis】

新型コロナウイルス流行という未曾有の危機に“不安”という要素がいかにか作用したのか、出来事毎に考察する作品。“不安”が一般的な感情であると肯定した上で、政治社会を知ることによって少しでも自分自身の不安をコントロールする手助けになれば、という願いをもって執筆された作品です。



(3) 左右社編集部 編『仕事本：わたしたちの緊急事態日記』（左右社 2020.6）

【図本館 3階 916 | |Say】

様々な職業・年齢・性別の人達が、緊急事態宣言発令によって変わってしまった日常を日記として綴った作品。公演中止に直面した舞台俳優や、商品棚に並べる豆腐が届かないことに困惑するスーパーの店員などの姿から、あの時戸惑っていたのは自分だけではなかったと思えると同時に、立場が変われば困り事にもこんなに差が出るものなのだ、と気づかされる作品でもあります。

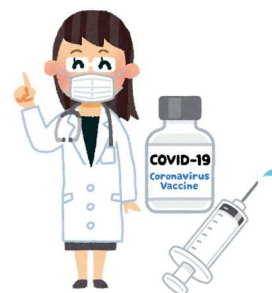


(4) 大竹裕 著 羽鳥まめ 画『60分でわかるカミュの「ペスト」』（あさ出版 2020.7）

【図本館 3階 953.7 | |Ota】

1947年に刊行された小説『ペスト』を、漫画・あらすじ・著者の考察で分かりやすく紹介した作品。新型コロナウイルス感染拡大で再び注目が集まっている名作ですが、「いきなり小説を手にするのはハードルが高い……。」というそんなあなたに正にお勧めしたい作品。(3)の『仕事本』でも複数の人が日記の中で「ペスト」について取り上げています。「あの話のことか!」となること、請け合いです。

常ならぬ事態に様々な情報が蔓延し、何を信じればいいのかわからなくなっている方も多いのではないのでしょうか。それぞれの人がそれぞれの立場で動き、情報を発信しており、意見に相違が出ている場合もあるかと思いますが、それでも、ある一部の情報だけを信じて即座に異なる意見を排除するのではなく、幅広い視点をもって情報を集め、考え、取捨選択しながら毎日を過ごしていただきたいと思います。そして、その情報収集の手段の一つに、図書館も入れていただければ幸いです。（資料サービス係 村上詩織）



## /// お知らせ ///

### 図書館講習会の開催について

岐阜大学図書館では、毎年、春（5月～6月）と秋（10月～11月）に資料の探し方や文献検索などのさまざまな講習会を行っています。

日程が決まり次第、図書館 Web サイト等でお知らせいたしますので、積極的な受講をお待ちしております。

学習や研究に、是非お役立てください。

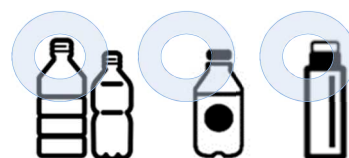
### 図書館の飲食ルール：持ち込み可能な飲み物について

館内は原則飲食禁止となっておりますが、水分補給等の健康上の理由から、フタ付きの容器に入った飲み物に限っては持ち込み可能としています。皆が気持ちよく図書館を利用できるよう、ご協力をお願いします。

#### 【持ち込み可】

ねじ式のフタ付き容器に入った飲み物は OK です。

例：ペットボトル、スクリューキャップの缶、マイボトル



#### 【持ち込み不可】

フタのないものは不可です。また、フタがあっても、倒れば簡単にこぼれる物は不可です。

例：カップ、紙パック、プルトップ式の缶、チルドカップ、トラベラーリッド付きカップ（コンビニでテイクアウトするホットコーヒーなど）



※図書館サービスの内容は感染症の流行等により変更となる可能性があります。  
最新の情報を図書館ホームページにてご確認ください。

#### 【タイトル「寸胴」について】

図書館エントランスホールにある陶壁画「寸胴譜」（作：九谷興子 1911-1998）は、陶器の原型「寸胴」を学生や若い研究者になぞらえ、社会への飛躍をイメージした作品で、図書館報のタイトルはそこから採っています。



岐阜大学図書館報「寸胴」第64号 2021年3月31日

編集・発行 岐阜大学図書館（学術情報課）

〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 ☎058-293-2184